

日本語文法研究書大成

北原保雄
古田東朔 編

草野氏 日本文法 全

勉誠社

日本語文法研究書大成

江苏工业学院图书馆
章 书 藏
山景保雄
古田東朔編

草野氏 日本文法 全

勉誠社

日本語文法研究書大成

【第1回配本】

草野氏 日本文法 全

編集

北原保雄
古田東朔

発行者

池嶋洋次

発行所

(株) 勉誠社

〒160 東京都新宿区西新宿四丁目一七

電話(〇三) 五三五一三二四一

平成七年一〇月二〇日 初版発行

製版

印刷

製本

互恵印刷(株)

(株) エイワ

ISBN4-585-08031-7 C3081

草野君が我が文科大學を卒業せられしは明治二十七年にして、恰も予が獨佛兩國の留學を了へて歸朝したる年なりき。爾來君は地方の學校に教鞭を執られしが、不幸にも肺患の侵す所となり、明治三十三年、終に白玉樓中の人となりたまひぬ。されど君には今茲に公にするが如き良き文法上の著述あり。誠にこれ君が所謂千金にも換へがたき一日僅に二時間の生命期を以て執筆せられたるもの、一度之を繙き讀む者、たれか君が熱誠に感嘆せざるべき、たれか此夭折せる著者の爲に、一點の涙を濺がざるべき。泰西の人いはずや、人は事業なり、學者の生命は著述にありと、しからば即ち君今亡し

といへども、君が精神は炳乎として此書の上にある、之を予輩が此數年間碌々として一事の爲すなく、一書の世を益するなきに顧みれば、君や誠に予輩をして愧死せしむるに足る。君が名も國語の榮えんかぎり、永く國民の記憶する所たるべきなり。聊か感ずる所を書して敢て序とすと云爾。

明治三十四年八月

上田萬年

例言

コノ書ハ未成ノ稿本ニシテ、總論、名詞、指詞、數詞、形容詞、互爾乎波及ビ文章篇ハ、粗淨寫整頓セラレタレドモ、聲音論、動詞、助動詞ハ舊稿ノマヽニテ、未ダ改定ノ緒ニ就カズ、就中動詞自他ノ章ハ僅ニ題目ノ説明ニ留マリ、副詞接詞、感詞ノ三章ハ全ク缺ケタリ。

全編章節ヲ分チ、對照參考ノ便ニ供セントシタルモノノ如ク、所々(第 節ヲ見ミ)、第 節ニ説クベシ」ナド、空白ヲ存シアレドモ、一々臆測ヲ以テ填補シ得ベキニアラズ、是等ハ一切删除セリ。又「例ヘバ」トノミアリテ其例ヲ出サズ、或ハ僅ニ原文ノ一二句ヲ記シテ、心覺エトシタルガ如キモ多シ。是等モ一目シテ其意ヲ了リ得ベキハ、成ルベク校定者ノ私意ヲ以テ補ヒタレドモ、間々決シ難キ所ハ強ヒテ筆ヲ加ヘズ、加之病中ノ起草塗抹改竄頗ル多クシテ、文章ノ連絡明カナラズ、前後入り亂レタル所モ少カラザルヲ以テ、往々著者ノ眞意ニ背キテ補綴セシモノモアルベシ、コハ其罪校訂者ニアリテ、故人ノ關知セザル所、讀者之ヲ諒セヨ。

校訂粗漏ニシテ、前後體裁ノ一致セザルトコロモ少カラザルベシ。コレモ著者ト讀者トニ對シテ深ク謝スル所ナリ。

明治三十三年七月

校訂者記ス

草野文學士小傳

草野文學士名は清氏、初め銀太郎と稱す、明治二年四月六日金澤古寺町に生る、父は清風、母は野崎氏、家世々加州藩士たり。學士性溫厚著實にして、夙に學を好み、稍長じて業を石川縣專門學校に修めしが、後筈を負うて東都に出で、第一高等中學校に入り、螢雪の効を積みて大學に進み、國文學科を修む。明治二十七年春偶助膜炎を患へ、病臥數月學を廢せしも、嚴君既に館を捐て、慈萱閨門に倚りて待つあるを以て、勉強して試問に應じ、同年七月業を卒へて文學士となり、翌年三月福岡縣立尋常中學明善校の聘に應じ、往いて教鞭を執る、教授懇到諄々として倦まず、子弟皆業を樂む。然るに往年の病根屢禍をなし、終に肺を侵し、病羸劇職に堪へざるを以て、二十九年七月職を辭して郷に歸り、靜に病を養ふ。北堂日夜君の病を憂へ、寢食俱に安からざりしが、此年冬遂に遠逝せらる。君卒業の年の一月家嚴を失ひ、今また病床慈母に別る、胸中の憂苦想ふべきなり。桑梓の地不祥にして、且氣候陰濕、寒暖恒なく、風土病軀に適せざるを以て、三十年八月去つて播州須磨に赴き、居を二の谷の翠微に卜し、白沙

青松の間、海風松籟に心身を療養せしも、疾既に膏肓に入り、血を嘔くこと頻にして、殆ど葬を離るゝ日なく、肉落ち骨出で、神経いよゝ敏にして、體力日に衰へ、三十二年九月十日秋風漸く枕上におとづれんとする頃、溘焉として瞑す、享年三十。室廣瀬氏遺骨を奉じて金澤に歸り、市の南郊野田山に葬る。君一女一弟あり、女名は淑、家を嗣ぐ、尙幼なり、弟名は繁、陸軍歩兵少尉たり。

君の大學に在るや、心を本邦の語法に潜め、日夜研鑽怠らず、同人目するに文法狂を以てす、君も亦私に文法學者を以て自ら任じたりき。然るに卒業の年、一度疾を獲てより、屢湯藥に親み、遂に不起の重患に陥り、勤學意の如くならず。されど一日も語典を編むの念を絶たず、病間筆をとりて記する所、哀然として筐に滿つ、或は一々古書に徴して、互爾波の用例を類別し、或は助辭の用法を統計して、其變遷を考察し、或は官府の布令時流名家の文に至るまで、筆を加へ朱を點じ、その誤を指摘したるが如き、用意の周密にして、氣根の精銳なる、強健の者尙之を見て忤怩たらざるを得ず、しかも君餘命の久しからずして、到底大著述を成すべき遑なきを慮り、力めて節略に従ひ、再三稿を改めて、其完成を期せんとす。君が瞑するの前一月、須磨の寓を訪ふ、眼

窩陥り助骨聳え、聲嗷れ息急にして、殆どこの世の人にあらざ、仰臥したるまゝ、少しく頭を回らし、余を顧みて曰く、今や此の如し、一日僅に二時間の執筆に堪へ得るのみ、此を以て文典の編述に充つ、この二時間は余の生命なり、千金も換ふる能はず、臥蓐以來兄等に消息を通ぜざるは、只此二時間を徒消せざらんが爲のみ、請ふ恕せよと、而も天無情にして、長く此二時間をすら君に假さず、刪定尙半ばにして、遂に白玉樓中の人となる、歎ずるに堪ふべけんや。今や君が遺稿を校するに方り、糊塗滿紙雌黃縱横の跡を見て、轉た其苦心を想ひ、又到底功を奏する能はず、等の文字を屢餘白に見る毎に、恨を吞みて瞑せし君が音容、髣髴として前に在るが如きを覺ゆ。此小冊子固より君が遺著として、其蒞蓄の十一を盡くすに足らず、しかも今や之を以て、君が唯一の紀念として満足せざるを得ず、吁嗟。

明治三十三年七月

辱知 藤井乙男

草野氏日本文法の後に書す

夜ふけ人静まりて、戸外霜刻々に厚く、一雁聲あり、寒月に叫ぶ。孤燈の下、おもひ結んでとけず、卷を覆ひて歎息すれば、涙しきりに机上におつ。嗚呼、草野清氏君は既にこの世の人にあらざるなり。君子と郷を同じくし、また大學に學びて時と科とを同じくす。資性穎敏、物を究むる、其奥を盡さずんば止まず。殊に日本文典の備はらざるを慨してその完成を己が任とし、坐臥進退、言のこれに及ばざるはなし。才子多くは多病、君大學にあること久しからずして、重患に罹る、病一旦は癒えて、學もまた卒へぬ。君が事業これより大いに見るべかりしなり。天無情、君また肺患に罹りて終に薨を出でず、空しく病軀をいだいて、須磨の風月に放浪す。風月は君が志にあらず。親しく子弟を教へんこと、望すでに絶え、蒞蓄せるところを列ねて世に遺さんこと、また期し難し。病をしひて筆をとり、筆をとりてまた仆る。業いまだ半ならずして止むは憾むべしと雖も、運命のあるところ、如何ともし難し、たい惜む、抱負の一端をも世に示さずして、身空しくまづ朽ちんことをと、これ君が死するまで口に絶たざりしとこ

ろなり。二の谷風物昨日に異ならずと雖も、颯々たる松風、恨は綿々として長し、君は遂に須磨に歿しぬ。舊友その家を訪ひて、篋底を探り、斷簡零墨をあつめて編しなせるもの、即ちこの遺稿なり。これを以ていまだ君が所説の一端をもつくすにたらず、或は却つて生前の君を後世にあやまる嫌なきにしもあらじといへども、予輩が敢てこれを輯むるは、追憶の情に堪へざればなり。この一小冊子、予輩よりこれを見れば、豈たゞに一文典たるに止まらんや、一字一句、以て東都學窓の君を見るべく、以て西攝病室の君をみるべし、君が涙こゝにあり、君が血こゝにあり。

明治卅三年二月廿一日夜

藤岡作太郎

草野氏日本文法目次

前篇 音聲及ビ文字ノ論

第一 音ヲ記ス方法……………一

音聲 音聲ト文字 文字ノ種類 假字ニ添ヘテ用ヰル標點

五十連音圖 音ト韻、行ト列 短音ト長音 濁音、半濁音、拗音、鼻

音、促音

第二 音便……………二四

音ノ變化 延音 約音 略音 加音 通音 通韻 轉音

第三 假名遣……………三一

音便ノ二種 假名遣ト二種ノ音便 假名遣ノ二種

詞篇

第一 總論……………五九

第二 名詞……………六〇

種々ノ名詞 名詞ノ崇敬法 名詞ノ數

第三 指詞 六五

定指詞 不定指詞 指詞ノ數

第四 數詞 七一

普通數詞 序數詞

第五 形容詞 七三

形容詞ノ活用 語尾 活用ノ種類

第六 動詞 七八

動詞ノ活用 活用ノ種類 動詞活用表 動詞活用表五階ノ用

動詞活用圖 階ノ音便 複合動詞 不完全動詞 動詞ノ時

動詞ノ自他

第七 助動詞 一三一

動詞活用表第一階ノ下ニ付クモノ 動詞活用表第二階ノ下ニツクモノ

第八 亘爾乎波 一七二

第一類(第一種、第二種、第三種) 第二類(第四種、第五種) 第三類(第六種、第七種)

文法篇

第一章

詞句相互ノ關係

二〇九

第一

名詞ト形容詞、動詞トノ關係

二一〇

主語 客語 總主語 補語 名詞格 一團一個ノ語

第二

修飾語ト被修飾トノ關係

二三〇

形容詞第四活用等ト名詞等トノ關係 副詞等ト動詞、形容詞及

ビ他ノ副詞等トノ關係 第二類互爾波ト他ノ詞句トノ關係

第三

詞句ノ接續

二四二

接詞ヲ用井ル法 第三類互爾波ヲ用井ル法

第四

獨立詞句

二四六

第二章

文又ハ文章

二四八

第一

文主、說語

二四九

第二

終止法

二五三

第三

單文

二六〇

第四 複文	二六二
-------	-----

二文ノ接續ニ互爾波ヲ要セザルモノ
二文ノ接續ニ互爾波ヲ用井ルモノ

第五 詞句ノ省略、並ニ轉例	二九一
---------------	-----

文主、説語ノ省略
第一類 互爾波ノ省略
合成ノ際ニ文主ヲ省略スルヲ
合成ノ際ニ第三類 互爾波ヲ省略スルニツキテノ注意
單文中ニ於ケル詞句ノ次第

第六 崇敬法	三〇〇
--------	-----

第七 解剖及ビ批判	三〇三
-----------	-----

附錄

國語ノ特有セル語法——總主	三〇七
---------------	-----

總主トハ如何ナル者ゾ
總主ト獨立詞句トチ區別ス、附、序ノ詞、枕詞トノ別
結論

言語ノ發達	三二二
-------	-----

緒論 動詞ノ語尾變化、即チ活用ノ事 活用セヌ言語ノ出來方
ニ就テ についてはノ事